相談事例　その１７３

## 亡くなった夫に対する見方が変わった『葬儀』

１月 10 日所長の職場の先輩だったＴさんが亡くなりました。翌朝妻のＫさんから葬儀の相談に乗ってほしいと電話が来ました。

所長は 3 回にわたって葬儀屋に同行し準備を進めました。故人の生きざまと遺族の要望により祭壇は質素なものとし無宗教で、ベートーベンの交響曲“第九”による音楽葬で献花方式としました。

お通夜の時と告別式の時、Ｔさんの友人 3 人ずつに弔辞をお願いし、それぞれから故人との関りでお世話になったこと、教えてもらったこと、励まされたこと、一緒にお酒を飲んだことなどを切々と語られ、故人の生前のきめ細やかな面倒見の良さと確信に満ちた政治革新の活動内容が明らかになり、ご遺族と参列者から「とてもいい葬儀でしたね」との感想が寄せられ感動的なお別れ会になりました。

Ｋさんは、お礼とお別れの挨拶で「寒い中多くの人にご参列いただいたこと、また家族の知らないところでこんなに多くの人のお役に立っていたとは驚きでした。故人の遺志を継いで地域で頑張りたい」と話されました。

私は本来、葬儀とは故人の生前のありし姿を遺族や参列者の心に残るものにすることにより遺族を激励するものでなければと考えています。

後日Ｋさんが「６人の心のこもった弔辞を聞いて亡くなった夫に対する見方が１８０度変わりました。本当にありがとうございました」と明るい顔で相談センターにお礼に見えました。

悔いの残らない葬儀にする為には元気なうちにどんな形式にしてほしいかをエンディングノートに書き残しておくことを是非お勧め致します。

くらしの相談センター所長
宮原春夫